

日本における医療政策の課題

黒川清

日本学術会議会長／東京大学先端科学技術
研究センター客員教授

黒川会長は、「他の講演者はスベシフィックな問題について述べるであろうから、私はもう少し大きな、世界的な問題について語ることで、まずみなさんと共通の認識を持ちたい」として、現在の急速な医療改革制度の背景にある、世界的な問題について講演した。

まず、黒川会長は、約二十万年前にホモサピエンスが誕生してから、現在に至るまで人類の歴史について振り返り、当然のことのように思われがちな現在のわれわれの生活が決して一朝一夕に培われたものではないということを強調。とくに、ここ百年における科学の急速な進歩、それがもたらした社会状況の変化について、「百年前にはライト兄弟がようやく十九メートルの高さを飛んだが、現在ではミュンヘン―東



黒川清 日本学術会議会長／
東京大学先端科学技術研究セ
ンター客員教授

京間は十時間足らずになった」、「百年前は七人に一人は結核で命を落としていたが、現在は生活習慣病がメインの疾患となっている」といった例を挙げた。さらに、「二千年前ローマ帝国の平均余命は二十五歳だったことについて触れ、それが百年前になってようやく、先進国では四十―四十五歳と倍になった。倍にするのにローマ帝国時代から二千年かかったわけだ。しかし、現在では先進国の平均余命は八十歳となっている。つまり、この百年で従来二千年かかったところを達成したわけである」と述べ、この急激な変化が現代に生きる人間に慢心をもたらし、しているとして以下のように警鐘を鳴らした。

「生活習慣病は、生活態度の悪い人が太った糖尿病になったりすることで発症する。しかし、百年前にそんな太った人がいただろうか。糖尿病患者がそんなにいただろうか。五十年前は糖尿病患者は十万人に過ぎない、現在は八百万人も存在する。たった五十年間で遺伝子が進化するのではない。原因は、生活態度以外の何物でもない。この間、洗濯機ができて水を汲む必要もなくなった、歩いて仕事に行くこともなくなった。それなのに、何で三度も食事する必要があるのだろうか。こういう病気は、十年も二十年も前から警告している。にもかかわらず、酒を飲んでタバコを吸うような人間の医療保険をどうしてみんなで共有しなければならないのだろうか。根本的な治療薬はないが、生活習慣を変える、禁煙運動をする、タバコは一箱千円

にするなど、やるべきことはたくさんあるはずだ」。

黒川会長は、「当たり前のように思っていることが当たり前のことではない」その代表例として、日本で毎年生まれる百万人の赤ちゃんのうち、一万二千人は試験管で生まれてくる（テストチューブベビー）ことを例に挙げ、さらに技術が進歩して遺伝子が簡易に見えてくるようになった場合、遺伝子の善し悪しにより、子どもを生む生まないという選択肢が出てくるようになると推測。しかし、それはあくまでも先進国の状況であって、先進国以外の場所では、依然として旧態以前のまま子どもが生まれてくる点を強調。「この先、先進国にはダウン症候群がまったくいなくなっても、発展途上国にはたくさんいる。そんな状況になるだろう」と述べ、これが人類として責任ある対応なのかどうか、もう一度深く考えていくべきではないかと疑問を呈した。

また、次世代への責任という観点から、地球温暖化を最たる課題に挙げ、「地球温暖化はこのまあいけば二十一世紀の終わりには気温が四―五度上がると推測されている。そうすると、水河がどんどん溶けて、水位も上がるといわれている。一方、この百年間で十六億人から六十四億人へと四倍になった地球上の人口は、五十年後に九十億人になり、それから一転して、どんどん下がると予想される。この下がり方は十四世紀のペストに襲われたのと同じぐらいの人

口減少率で、百年後は七十億人になるといわれている。しかし、一度起こった地球温暖化の影響は確実に千年以上続いていくわけだ。今の世の中の人々は、子どもたちにそういう世界を残していきたいのだろうか」と述べた。さらに、六十四億人の人口のうち八割が発展途上国と未開発国に在るといふ南北格差についても、「みんな知っていることだ。知っていて、自分達の国のヘルスケアのリフォームだけでいいのだろうか。それが一番大事なポイントではないか」と述べ、たとえば、世界中に四千万人いるとされるエイズ患者、そのうちの七割がアフリカに在るといふ現状に対しても、比較的小金のある国として何を行うべきか、国としての明確なビジョンの必要性を説いた。

地球温暖化とアフリカ問題は、本年八月にイギリスにて開催されるG8サミットにおいても主要テーマとして掲げられているが、黒川会長はその理由について、ブレア首相が『これがわれわれの世代のミッションであり、五十年先の世代から批判されるのを避ける責任がある問題だから』というコメントを引用し、「われわれの世代はいい。しかし、われわれの子どもや孫の世代に問題だらけの地球を残し、五十年経って、その人達に『こういうことになるのを分かっている放っておいたのか』と言われてもいいのだろうか。それがわれわれ世代の責任である」と述べた。

最後に「急速に進む医療制度改革の裏にこのような状況が潜んでいるということを承知した

上で、先進国といわれる日本とドイツは今後どういうことをしていくのか。どんな国になりたのか、なっていくたいのか。それを考えるのが、それぞれの分野のリーダーの一番大きな国での責任であり、世界での責任である」とまとめた。